

## 5 歳児の罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響について

石 川 隆 行<sup>1</sup> 内 山 伊知郎<sup>2</sup>

本研究は、5 歳児の罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響を検討した。その際、罪悪感を感じる場面として対人場面と規則場面を設定した。幼稚園 5 歳児 100 名を対象として、罪悪感、共感性および役割取得能力について面接法で測定した。罪悪感については、どれくらいあやまりたい気持ちになるかを測度とした。また、共感性は AST (Affective Situation Test)、役割取得能力は Selman 課題で測定された。その結果、共感性は対人場面での罪悪感に影響し、役割取得能力は規則場面での罪悪感に影響することが明らかになった。したがって、5 歳児では対人場面と規則場面では罪悪感の規定因が異なることが示唆された。

キーワード：罪悪感、共感性、役割取得能力、5 歳児

### 問 題

近年、低年齢化および悪質化傾向をたどる反社会的行動は、深刻な社会的問題となり、罪悪に対する感情の発達について深く考察する必要がでてきている。

罪悪感とは、ひとが設けた社会的基準あるいは自己基準を破ったときに関係する後悔の念として定義され、その結果、悪い行為に対する償いやあやまりたいという気持ちを生じさせると考えられている (Tangney, 1991)。

従来の研究から、罪悪感是不適切に働く場合、精神障害を引き起こすことがあると報告されている (Bybee, Zigler, Berliner & Merisca, 1996)。しかし、適切に機能したときには、悪事を妨げ、償いや許しを求める行動を刺激すると考えられ (Ausubel, 1955 ; Williams & Bybee, 1994)、向社会的行動を促進するのである (Chapman, Zhan-Waxler, Cooperman & Iannotti, 1987)。

ところで、罪悪感はおおよそ 2 歳頃に表出され始める (Hoffman, 1979 依田・宮前訳, 1981 ; Zhan-Waxler, Radke-Yarrow & King, 1979)。その表出された罪悪感とは、おおよそ 5 歳頃に言葉を通して表現される (Ridgeway, Waters, Kuczaj, 1985)。その中で、Chapman et al. (1987) は幼児期の罪悪感を例話を用いて測定し、幼児の罪悪感が向社会的行動と関係することを明らかにしている。

また、Ferguson, Stegge & Damhuis (1991) は、児童の罪悪感についての理解を、罪悪感を表わす言葉を選択させる方法で検討している。その結果、あやまりたい気持ちという言葉が、子どもの罪悪感を最も反映

する言葉として選択されたことを見いだした。そして、この結果に基づいて、あやまるという表現を用いた幼児期に適用できる母親用の罪悪感質問紙を作成している (Ferguson & Stegge, 1998)。

これらの研究から、幼児期の子どもに罪悪感が既に存在し、子どもの向社会性の一因となっていることがわかる。しかし、そこでは、罪悪感を感じる状況の分析や、罪悪感に影響を及ぼす規定因の分析がなされていない。そこで、従来、社会性の発達に重要である共感性や役割取得能力を罪悪感と関連づけて、その規定因を検討することは意義深いであろう。この点について、Hoffman (1976, 1998) は罪悪感には他者への同情的苦しみと、他者視点を認識し、そこから行為を捉えようとすることが重要であると論じており、罪悪感において共感性と役割取得能力の必要性を指摘している。

第 1 に、共感性は、知覚した他者の情動経験に対する知覚者の代理的情動反応と定義され (Feshbach & Roe, 1968)、それは認知的発達とともに高まり (Hoffman, 1979 依田・宮前訳, 1981)、一般に女子が男子より共感的である (Bryant, 1982) と報告されている。渡辺・滝口 (1986) では、幼稚園児を対象として共感性の年齢差や性差が検討されている。ここでは、Feshbach & Roe (1968) が用いた AST (Affective Situation Test) を使用し、幼稚園児の共感性を測定している。この AST は、例話とそれを表現した図版から喚起された被験者の感情と、主人公の感情の一致によって共感性を測定するものである。

このように共感性に関する研究は幅広くなされており、子どもの社会化との関わりが実証されている (e.g., Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991)。その中で、

<sup>1</sup> 同志社大学文学研究科

<sup>2</sup> 同志社大学 iuchiyam@mail.doshisha.ac.jp

共感性は罪悪感と関係することが見いだされている (Tangney, 1991)。実際, Thompson & Hoffman (1980) は, 罪悪感の規定因として他者へ共感することをあげ, それが罪悪感を喚起させると論じており, この理論は最近の研究でも支持されている (Tangney, 1991; Krevans & Gibbs, 1996)。

第2に, 役割取得能力とは, 他者の立場に立ち, 他者の視点, 思考および感情を認識する能力である (荒木, 1988)。役割取得能力の発達段階を明らかにした Selman (1976) は, この能力の発達を子どもの視点と他者の視点の分化し, 視点間の調整がされていく構造的変化の過程と考えて, 社会的視点取得能力の発達とみなした。なお, 荒木 (1988) によれば, Selman (1976) が提起した発達段階は次の通りである。段階0: 自己中心的な役割取得 (約3歳から6歳), 段階1: 主観的役割取得 (約5歳から9歳), 段階2: 自己内省的役割取得 (約7歳から12歳), 段階3: 相互的役割取得 (約10歳から15歳), 段階4: 慣習的および象徴的役割取得 (約12歳から成人)。

この発達段階に基づいて, Selman & Byrne (1974) は, 幼児期の子どもにジレンマ物語を提示することで役割取得能力を測定し, この能力が加齢にともない発達することを見いだした。また, 役割取得能力は向社会性の発達を促進するとも考えられている (Strayer & Roberts, 1989)。

わが国でも幼児期の役割取得能力が検証されており, その発達の变化が示されている (荒木, 1988; 山岸, 1980, 1981)。とくに, 荒木 (1988) は, Selman & Byrne (1974) が用いたジレンマ物語を標準化し, 低年齢用の役割取得能力検査を作成している。また, Selman (1976) は, 役割取得能力の発達にともない, 自他の視点の分化がなされ, 他者, さらに社会的な視点から自分の行為を捉えることができると指摘している。そして, 自他の視点を公平にしたり, また調整したりするという役割取得能力の性質から, Selman & Demorest (1984) は対人交渉方略の中でこの能力を捉えている。したがって, この Hoffman の理論や Selman が提唱する役割取得能力の性質から, 罪悪感に役割取得能力が影響を及ぼすであろうと考えられる。すなわち, 罪悪感とは他者視点を認識することによって生じると考えられる。さらに, Leith & Baumeister (1998) は, 罪悪感を感じる時に他者の視点の認識が必要であると論じ, 青年期において役割取得能力が罪悪感と関係することを見いだしている。

なお, これら共感性と役割取得能力は密接に関係す

るといわれ, 役割取得能力は共感性の認知的側面として扱われている。一方で, 役割取得は知覚的, 認知的, 感情的な役割取得に区別され, その中で共感性和関係するのは感情的な役割取得と考えられている (Davis, 1994 菊池訳, 1999)。本研究で使用する Selman 課題は自己と他者の視点との相違を測定するものであり, 認知的な役割取得を反映するものと思われる。また, 前述したように, Hoffman (1976, 1998) は, 罪悪感が他者への直接的な感情反応や他者視点から自分の行為を認識することにより生起することを考慮すると, 共感性和役割取得能力を分けて考える必要があると論じている。この意味において, 本研究では, 罪悪感に対する共感性和役割取得能力の影響を検討する際, この2つを独立したものとして扱った。

そこで, 本研究では, 罪悪感の重要な要因として共感性和役割取得能力を取り上げ, 5歳児で感じられる罪悪感に及ぼす共感性和役割取得能力の影響について検討した。その際, 子どもが罪悪感を感じる場面として対人場面および規則場面を設定した。これは, 次の2つの理由からである。1つは, 児童が罪悪感を喚起する事象を自由記述により検討した石川・内山 (1997) から, 罪悪感とは「人のものを壊すこと」や「友達とケンカをすること」などの対人状況と, 「信号無視」や「校則に従わないこと」などの規則状況から喚起されることが明らかになっており, 罪悪感を対人場面と規則場面に分けて考える必要が示唆されているからである。2つ目は, 社会的なルールからの逸脱は罪悪感と関係すると論じられている (Izard, 1991)。そこで, 子どものルールの理解を検討した Smetana (1981) から, 幼児が対人的なルール (道徳) と社会を調整する作用をもつルール (慣習) をある程度理解しているという結果を考慮したためである。

本研究は探索的な研究として位置づけられるが, 以上のことをふまえ, 次の仮説を設定した。

仮説: 先行研究から罪悪感を測定できるとされる幼稚園5歳児を対象として, 罪悪感に及ぼす共感性和役割取得能力の影響を検討する。これは Hoffman (1976, 1998) の理論に基づくものである。すなわち, 共感性や役割取得能力が高い幼児は罪悪感が高いと推測される。また, 先行研究を考慮し, 罪悪感を感じる場面对人場面と規則の2場面に分け, その場面に及ぼす共感性和役割取得能力の影響を検討する。その結果, 共感性和役割取得能力の働きを考えると, その影響は場面によって異なると推測される。それは, 対人場面では違反行為により直接迷惑をかけた他者を思いやる, また規則

場面では違反行為を犯した自分を他者視点からみるという、それぞれ共感性と役割取得能力の側面が機能するからである。

## 方 法

**被験者** 幼稚園5歳児100名(男児48名, 女児52名: 平均5.3歳, 55ヶ月から66ヶ月)であった。

**測定尺度** 罪悪感の測定 対人場面と規則場面の2場面における罪悪感を、「どれくらいあやまりたい気持ちになるか」と尋ねて求めた。その際、対人、規則の両場面については、それぞれ2例話(合計4例話)とその内容を線画した図版を使用した。各場面の例話については、実験者と幼稚園の先生との話し合いにより作成した。なお、被験者の性別と例話中の登場人物の性別を一致させた。場面における例話は以下に示す通りである。

### 対人場面

- (a) 太郎君(じゅん子ちゃん)はお父さんの大切な花瓶を割ってしまいました。
- (b) 太郎君(じゅん子ちゃん)は友達とケンカをしてしまいました<sup>3</sup>。

### 規則場面

- (a) 太郎君(じゅん子ちゃん)は赤信号を渡ってしまいました。
- (b) 太郎君(じゅん子ちゃん)は幼稚園の廊下を走ってしまいました。

また、幼稚園児のあやまりたい気持ちになる対象(人物など)を把握するため、各例話ごとに「誰にあやまりたい気持ちになるか」という問いについて反応を求めた。

共感性の測定 Feshbach & Roe(1968)のAST(Affective Situation Test)を用いた。そして、ここでは渡辺・滝口(1986)と浅川・松岡(1987)を参考にして各感情場面(喜び、悲しみ、恐れ、怒りの4場面)を作成した。また、幼稚園児の性別に合わせて場面を提示できるよう主人公を男女別にした。各感情場面は以下に示す通りである。

**喜 び**：男の子(女の子)が両親からプレゼントをもらっている場面

<sup>3</sup> 本研究において、罪悪感場面である対人、規則場面を設定した1つの理由として、Smetanaの幼児におけるルール理解の領域である「道徳」と「慣習」を参考にした。その「道徳」領域に準ずるため、本研究で使用した対人場面のケンカの図版は子どもが相手を殴る場面となっている。

**悲しみ**：男の子(女の子)が壊れたおもちゃの飛行機(ぬいぐるみ)を手に行っている場面

**恐 れ**：男の子(女の子)が大きな犬に追いかけて逃がっている場面

**怒 り**：男の子(女の子)が書いた絵を友達に破られて、ケンカしている場面

役割取得能力の測定 Selmanの例話である木登り課題を使用し、検査は市販されている役割取得能力検査(荒木, 1988)を用いた。なお、役割取得能力の発達段階は、段階0 A：自己中心的な視点、段階0 B：自己中心的ではあるが相手の気持ちは理解できる、段階1：主観的役割取得、段階2：自己内省的役割取得、段階3：相互的役割取得である(荒木, 1988)。以下に、課題内容の粗筋と各段階の反応例を示す。

木登り課題(荒木, 1988から抜粋)

木登りの上手なじゅん子さんは、木から降りようとして、落ちてしまいました。

それを見ていたお父さんは、じゅん子さんをきつくしかりました。じゅん子さんは「もう木には登らない。」とお父さんと約束しました。

数日後のこと、となりの太郎君の子猫が、木に登って降りられなくなっています。太郎君は「お願い、子猫を降ろしてやって。」と、じゅん子さんに頼みました。

じゅん子さんは、お父さんとの約束を思い出して困ってしまいました。

段階0 Aの反応例：他人の表面的な感情や表情は理解するが、自分の感情と混同することが多い。同じ状況にいても、他の人と自分とは違った見方をすることがあることに気がつかない。

Q. 木に登っているじゅん子をお父さんが見たら、お父さんはどんな気持ちになると思う？

A. うれしいと思う。だってお父さんも猫が好きだから。

Q. お父さんはどう思うかな？

A. わからない。

段階0 Bの反応例：泣く、笑うなどはっきりした手がかりがあると、相手の気持ちを判断することができる。しかし心の奥にある本当の気持ちにまで考えがおよばない。

Q. 木に登っているじゅん子をお父さんが見たら、お父さんはどんな気持ちになるかな？

A. しかる。約束を破ったから。

Q. どうしてじゅん子は約束させられたのかな。

A. わからない。

段階1の反応例：与えられた情報や状況が違っていると、それぞれ違った感情をもったり、異なった考え方をもつことはわかるが、他の人の立場に立って考えることができない。

Q. 木に登っているじゅん子をお父さんが見たら、お父さんはどんな気持ちになるかな？

A. お父さんは心配する。

Q. どうしてじゅん子は約束させられたのかな？

A. お父さんはじゅん子にけがをして欲しくないから。

段階2の反応例：自己の考えや感情を内省できる。他の人が自分の思考や感情をどう思っているかを予測できる。

Q. 木に登っているじゅん子をお父さんが見たら、お父さんはどんな気持ちになるかな？

A. じゅん子がどうしても猫を助けたいと思っていることをわかってくれる。

段階3の反応例：第三者の視点を想定できる。人間はお互いにお互いの考えや感情を考慮して行動していることに気がつく。

Q. 木に登る前に、じゅん子さんとお父さんでどうすればよいか話し合っていたら、どうなっていたと思いますか？

じゅん子さんの気持ちとお父さんの気持ちの両方を考えて答えて下さい。

A. じゅん子が猫を助けたいと思っていることもよくわかるけれど、けがをするのが心配だから木登りを許さないというお父さんの気持ちもよくわかるから、登らない。

**手続き** 調査は幼稚園内の一室で、各園児個別に実施した。そして、園児すべてが、上記の3つの検査を受けたが、検査の順番はランダムであった。なお、罪悪感の測定については、まず、「あやまりたい気持ちにな

るか否か」を尋ね、その後「どのくらいあやまりたい気持ちになるか」について反応を求めた。

**結果の得点化 罪悪感の測定** 各例話について、「どれくらいあやまりたい気持ちになるか」という問いに、ならない(0点)、少しなる(1点)、たくさんなる(2点)の3段階尺度で回答を求めた。なお、この3段階評定は調査者が口頭で求めると同時に、園児に対し両手を使って“少し”と“たくさん”の幅を示した。そして、各場面ごとの2つの例話を合計し、それぞれ対人場面の罪悪感得点と規則場面の罪悪感得点とした。その結果、対人、規則両場面の罪悪感得点範囲は0～4点となった。

**共感性の測定** Feshbach & Roe (1968) に従って得点化した。すなわち、例話の主人公の感情と被験者の感情反応が一致し、さらにその感情反応が実施した感情場面と一致していれば1点を与えた。得点範囲は、場面の数により0～4点であった。

**役割取得能力の測定** 荒木(1988)の評定基準に従って得点化した。その際、役割取得能力の発達段階である段階0Aを1点、段階0Bを2点、段階1を3点、段階2を4点、段階3を5点とした。なお、本研究では、段階1、段階2、段階3は出現しなかった。

## 結 果

各場面の罪悪感得点については、対数変換を行い以下の分析に用いた。

### 1. 各変数について

TABLE 1 に場面別の罪悪感得点および共感性得点の性別平均値と標準偏差を示した。

場面別の罪悪感得点について、性別を被験者間要因、場面を被験者内要因とする2要因分散分析を行った<sup>4</sup>。その結果、性別の主効果、場面の主効果および交互作用はともに有意ではなかった。

また、共感性得点について、男女差のt検定を行っ

TABLE 1 場面別の罪悪感得点および共感性得点の性別平均値と標準偏差

	男 児	女 児	全 体
対人場面	2.81 (1.07)	3.20 (0.97)	3.01 (1.03)
規則場面	2.65 (1.23)	3.00 (1.09)	2.83 (1.17)
共感性得点	1.63 (1.33)	1.81 (1.36)	1.72 (1.34)

<sup>4</sup> 場面別に2例話を合計せずに、各例話ごとに性差と例話間の差を検討した結果、各場面の性差、例話間の差は有意ではなかった。

たが、性差は認められなかった。

役割取得能力の発達段階については段階 0 A と段階 0 B のみが出現した。全体の出現頻度は、段階 0 A が 31.0% (n=31), 段階 0 B が 69.0% (n=69) であった。性別にみると、男児の出現頻度は、段階 0 A が 31.3% (n=15), 段階 0 B が 68.7% (n=33) であった。一方、女児は段階 0 A が 30.8% (n=16), 段階 0 B が 69.2% (n=36) であった。この出現頻度に関して、性別について  $\chi^2$  検定を行ったところ有意差は認められなかった。

なお、共感性と役割取得能力の関係を検討するため、共感性得点について、役割取得能力の段階差(段階 0A と段階 0B) の t 検定を行ったが、有意差は認められなかった。

さらに、あやまりたい気持ちになる対象について、各例話ごとに回答率を算出したところ、幼稚園児は以下の割合であやまりたい気持ちになる人物や対象を回答した。対人場面の花瓶を割ることについての例話(a)では「親に」が 93.5%, ついで「皆に」が 2.2% であった。また、友達とのケンカについての例話(b)では「友達に」が 88.8%, ついで「親に」が 4.5% であった。他方、規則場面の赤信号を渡ることについての例話(a)では、「親に」が 25.8%, ついで「信号機に」が 18.0%, 「車を運転している人に」が 16.9%, 「お巡りさんに」が 11.2% であった。また、廊下を走るることについての例話(b)では「幼稚園の先生に」が 71.3%, ついで「友達に」が 13.8%, 「皆に」が 6.3% であった。

## 2. 対人場面および規則場面の罪悪感に及ぼす共感性と役割取得能力の影響について

まず、共感性と罪悪感の関係を検討するため、共感性と罪悪感場面別の相関係数を算出した。その結果、共感性は対人場面の罪悪感と相関が有意傾向で認められた ( $r=.20, p<.10$ )。

そこで、共感性得点と役割取得能力をそれぞれ低群と高群に分けた。役割取得能力については、段階 0 A を低群 (n=31), 段階 0 B を高群 (n=69) とした。また、共感性については平均値 (1.72 点) と人数の度数を考慮し、共感性得点の 0 点, 1 点を低群 (n=41), 2 点, 3 点, 4 点を高群 (n=59) とした。そして、対人、規則の場面別における罪悪感得点平均値と標準偏差を TABLE 2 に示した。

対人場面の罪悪感得点について、共感性と役割取得能力を被験者間要因とする 2 要因分散分析を行った<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> 場面別に 2 例話を合計せずに、各例話ごとに共感性 (低・高群) と役割取得能力 (低・高群) の分散分析を行った結果、対人場面の各例話それぞれに共感性の主効果、また規則場面の各例話それぞれに役割取得能力の主効果が有意傾向であった。

TABLE 2 共感性得点低, 高群と役割取得能力段階 0 A, 0 B についての場面別の罪悪感得点平均値と標準偏差

	共感性		役割取得能力	
	低	高	0 A	0 B
対人場面	2.72 (1.17)	3.20 (0.89)	2.84 (0.97)	3.09 (1.06)
規則場面	2.62 (1.27)	2.97 (1.08)	2.45 (1.34)	3.00 (1.04)

その結果、対人場面の罪悪感得点において共感性の主効果が認められた ( $F(1,97)=5.73, p<.05$ )。

同様に、規則場面の罪悪感得点について、共感性と役割取得能力を被験者間要因とする 2 要因分散分析を行った。その結果、規則場面の罪悪感得点において役割取得能力の主効果が認められた ( $F(1,97)=4.69, p<.05$ )。

なお、両場面の罪悪感得点について、共感性と役割取得能力の交互作用はみられなかった。

これらの結果から、対人場面では共感性の高い 5 歳児、また、規則場面では役割取得能力の高い 5 歳児がそれぞれの罪悪感が高いことが明らかになった。

## 考 察

まず、はじめに本研究では対人、規則両場面の罪悪感の性差を検討した。その結果、両場面において性差はみられなかった。罪悪感については、これまでの研究から児童期以降に性差が明確になることが示唆されている。したがって、罪悪感における性差は 5 歳児では明確にならないのであろう。この点については、児童期から青年期にかけての研究でさらに検討することが必要である。

一方、罪悪感場面の比較、すなわち 5 歳児は対人場面と規則場面の罪悪感のどちらを強く感じるかを検討した結果、その差異は認められなかった。子どもにとってのルールの重要性を検討した Smetana (1981) では、幼児が対人的なルール (道徳) 違反を社会的相互作用のルール (慣習) 違反よりも重視することを報告している。この結果から、本研究でも 5 歳児は対人場面の罪悪感を規則場面の罪悪感よりも強く感じると推測される。しかし、本研究ではそのような結果は見いだされなかった。この点について、悪いという判断と罪悪感とは別々に機能していることが指摘されている (Jones, Kugler & Adams, 1995)。このことから、5 歳児の中でもルールの逸脱を悪いとする認知的な判断と、その逸脱に対してあやまりたいという罪悪感は異なって機能しているのかもしれない。

また、共感性については性差がみられなかった。渡辺・瀧口 (1986) は、共感性について、年中児では女兒が男児よりも高いことを見いだしている。本研究でも、統計的に有意差は確認されていないものの、女兒の共感性が男児よりも高い傾向がうかがえる。

さらに、役割取得能力については、発達段階の分布に関して、荒木 (1988) と一致する結果が本研究でも得られた。性差については、山岸 (1980, 1981) の結果と同様、本研究でもみられていない。役割取得能力は、とくに幼児期から児童期を通じて発達するが、その発達過程には性差はみられないのかもしれない。

なお、本研究の結果から、役割取得能力の段階の高低について、共感性得点に有意差がみられないことが明らかになった。これにより、本研究で測定した共感性と役割取得能力は互いに独立したものと考えられる。そして、この結果は Davis (1994 菊池訳, 1999) の見解を支持するものであろう。

次に、本研究では罪悪感がどのような対象に向くのか、すなわち誰にあやまりたい気持ちになるかを測定した。その結果、規則場面では直接的に迷惑をかける他者が存在しないため、その対象が分散していると思われる。しかし、対人場面ではそのような他者が明確に存在するため、あやまりたい対象がしばられると考えられる。

また、子どもは直接迷惑をかけた他者、あるいは頻繁にしつけをしている者に罪悪感を感じやすいことが報告されている (Williams & Bybee, 1994)。本研究でもこの知見と一致する結果が得られている。すなわち、対人場面ではこの直接的な対象が反映され、幼稚園児は両親や友達という直接迷惑をかけた相手に罪悪感を感じている。一方、規則場面については交通場面では両親に、幼稚園内場面では幼稚園の先生に罪悪感を感じていることから、幼稚園児はこれらの場面について両親や先生から主に教育を受けていると考えられる。

最後に、本研究の主目的である罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響について考察する。本研究の結果から、対人場面の罪悪感には共感性が影響し、規則場面の罪悪感には役割取得能力が影響することが明らかになった。これは、罪悪感が感じられる場面によって、それに関与する要因が異なることを示唆している。

まず、対人場面 (お父さんの花瓶を割る場面、友達とのケンカの場面) で感じられる罪悪感には共感性が影響している。このことから、共感性が高い5歳児ほど、相手に対する感受性が高いため、自分の行為が相手に迷惑をかけたという意識をもち、相手の苦しみや痛みを強く

共感し、罪悪感を感じやすいと考えられる。Hoffman (1976, 1998) や Thompson & Hoffman (1980) が述べているように、他者の苦痛に対する共感性の高まりが罪悪感を喚起させるのであろう。

また、規則場面 (赤信号を渡る場面、廊下を走る場面) において感じられる罪悪感には役割取得能力が影響を及ぼすという結果が得られた。これにより、役割取得能力の高い5歳児は、低い5歳児よりも他者の視点を推論する能力が高いため、社会的規則への意識が強く、規則を破って行動することが悪いことであると正確に認識していると思われる。そして、その違反行動を自分の視点からではなく、他者の視点や立場から自分の違反行為をみようとする働きが生じ、罪悪感が喚起するのであろう。また、本研究で得られたあやまりたい対象の知見から考察すると、規則場面において5歳児が認識する他者視点は、親や先生の視点なのかもしれない。Hoffman (1976, 1998) や Leith & Baumeister (1998) で論じられた自分の視点から離れ、他者視点を認識しようとすることによって、罪悪感を感じることは5歳児の子どもにもみられ、その関係は本研究よりとくに規則場面の罪悪感に関係すると推測される。

## おわりに

本研究では、罪悪感の規定因として共感性と役割取得能力を取り上げ、5歳児を対象として対人場面と規則場面における罪悪感を検討した。

その結果、本研究では Hoffman (1976, 1998) の理論と一致する結果が得られた。すなわち、共感性と役割取得能力の2つの向社会的能力は罪悪感と密接に関係するのである。そして、本研究からその関係は罪悪感場面 (対人, 規則) によって異なると考えられる。

このように、様々な罪悪感場面を通して、5歳児の罪悪感は他者への共感や、自他の視点の分化を認識する能力が複合して働き、高まるのであろう。

本研究の今後の課題としては以下の点があげられる。まず、罪悪感の測定方法についてである。本研究では、感情面に近づけた「あやまりたい気持ちになるか」を測度として用い、その程度を口頭で求めた。そして、“少し”と“たくさん”という気持ちの程度を両手を使用して補助した。その際、程度の大小に合わせて、両手の幅を一定にすることを心掛けたが、より正確さを増すために、大小を示すための図版を用いることが今後の展開として考えられる。また、各場面において「誰にあやまりたい気持ちになるか」を尋ね、あやまりたい気持ちになる対象を求めた。この手法は、本研究で

設定した対人場面の例話のように、あやまる対象が明らかに存在する場合には適していると考えられる。しかし、規則場面の例話のように、あやまる対象が直接存在しない場合、幼児に混乱をきたすことがありえよう。これは、実際に、規則場面の信号無視場面において、5歳児が「信号機に」という人物でない対象を答えているからである。あやまる対象を尋ねることは、罪悪感の喚起を検討するうえで重要な課題の1つといわれている(Williams & Bybee, 1994)。したがって、様々な罪悪感場面において、幼少の子どものあやまる対象を明確に解明する手法についても検討の余地が残る。

次に、共感性と役割取得能力の関係についてである。本研究では、共感性と役割取得能力を独立したものとして扱った。そして、その関係を検討した分析からも独立していることを表わす様相が示された。しかし、従来、子どもの向社会的行動の視点からみれば、共感性と役割取得能力が密接に関係するという見解もある(Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991)。また、この役割取得能力の機能について、本研究よりこの能力は規則場面の罪悪感に影響した。そして、高い役割取得能力の反応を示した被験者にみられる他者視点を認識する強さが、その影響に反映していると推測した。しかし、本研究のSelman課題で測定された役割取得能力の段階から、そのように推察するのには、役割取得能力の働きを過大視している傾向があると思われる。さらに、役割取得能力と罪悪感に関係することを見いだしたLeith & Baumeister (1998)は、役割取得能力を共感性の認知的側面と考え、罪悪感はこの認知的側面と関係するとも指摘している。その意味において、規則場面の罪悪感にはより認知的な要素が反映しているのかもしれない。

以上のことから、役割取得能力が規則場面の罪悪感に及ぼす影響については、共感性と役割取得能力の関係を詳細に検討したうえで、理解していくことが必要であろう。

最後に、罪悪感と道徳的判断との関係である。罪悪感という感情を検討するうえで、認知的な道徳的判断は重要な要因となる。そして、多くの研究者によれば罪悪感と道徳的判断は強く関係するとされている(e.g., Izard, 1991; Tangney, 1991)。そのため、この道徳的判断と罪悪感の相違を明確に分析し、両者を総合的に検討して子どもの罪悪感を解明していくことも重要であろう。

## 引用文献

- 浅川潔司・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達の研究 教育心理学研究, **35**, 231—240.
- 荒木紀幸 1988 役割取得検査マニュアル トーヨーフィジカル
- Ausubel, D.P. 1955 Relationships between shame and guilt in the socializing process. *Psychological Review*, **62**, 378—390.
- Bryant, B.K. 1982 An index of empathy for children and adolescents. *Child Development*, **53**, 413—425.
- Bybee, J., Zigler, E., Berliner, D., & Merisca, R. 1996 Guilt, guilt-evoking events, depression, and eating disorders. *Current Psychology : Developmental, Learning, Personality, Social*, **15**, 113—127.
- Chapman, M., Zhan-Waxler, C., Cooperman, G., & Iannotti, R. 1987 Empathy and responsibility in the motivation of children's helping. *Developmental Psychology*, **23**, 140—145.
- デイヴィス M.H. 菊池章夫(訳) 共感の社会心理学—人間関係の基礎— 1999 川島書店 (Davis, M. H. 1994 *Empathy : A social psychological approach*. Boulder, CO, Westview.)
- アイゼンバーグ N.・マッセン P.H. 菊池章夫・二宮克美(訳) 思いやり行動の発達心理 1991 金子書房 (Eisenberg, N., & Mussen, P.H. 1989 *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge, England : Cambridge University Press.)
- Ferguson, T.J., & Stegge, H. 1998 Measuring guilt in children : A rose by any other name still has thorns. In J. Bybee (Ed.), *Guilt and children*. San Diego : Academic Press. Pp. 19—74.
- Ferguson, T.J., Stegge, H., & Damhuis, I. 1991 Children's understanding of guilt and shame. *Child Development*, **62**, 827—839.
- Feshbach, N.D., & Roe, K. 1968 Empathy in six- and seven-year-olds. *Child Development*, **39**, 133—145.
- Hoffman, M.L. 1976 Empathy, role-taking, guilt, and development of altruistic motives. In B. Puka (Ed.), 1994 *Reaching out : Caring, altruism, and prosocial behavior*. Moral devel-

- opment : A compendium, Vol.7 New York : Garland Publishing. Pp. 196—218.
- ホフマン M.L. 依田 明・宮前 理(訳) 道徳性の発達—道徳的思考・感情・行動の発達— 依田 明(監訳) 1981 現代児童心理学 4 情緒と対人関係の発達 金子書房 (Hoffman, M.L. 1979 Development of moral thought, feeling, and behavior. *American Psychologist*, 34, 958—966.)
- Hoffman, M.L. 1998 Varieties of empathy-based guilt. In J. Bybee (Ed.), *Guilt and children*. San Diego : Academic Press. Pp. 91—112.
- 石川隆行・内山伊知郎 1997 児童が罪悪感を喚起される事象についての検討 同志社心理, 44, 1—5.
- Izard, C.E. 1991 *The psychology of emotion*. New York : Plenum Press.
- Jones, W.H., Kugler, K., & Adams, P. 1995 You always hurt the one you love : Guilt and transgression against relationship partners. In J.P. Tangney & K.W. Fisher (Eds.), *Self-conscious emotions : The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York : Guilford Press. Pp. 301—321.
- Krevans, J., & Gibbs, J.C. 1996 Parents' use of inductive discipline : Relations to children's empathy and prosocial behavior. *Child Development*, 67, 3263—3277.
- Leith, K.P., & Baumeister, R.F. 1998 Empathy, shame, guilt, and narratives of interpersonal conflicts : Guilt-prone people are better at perspective taking. *Journal of Personality*, 66, 1—37.
- Ridgeway, D., Waters, E., & Kuczaj, S.A. 1985 Acquisition of emotion-descriptive language : Receptive and productive vocabulary norms for ages 18 months to 6 years. *Developmental Psychology*, 21, 901—908.
- Selman, R.L. 1976 Social-cognitive understanding. A guide to educational and clinical practice. In T. Lickona (Ed.), *Moral development and behavior*. New York : Holt. Pp. 299—316.
- Selman, R.L., & Byrne, D.F. 1974 A structural-developmental analysis of levels of role taking in middle childhood. *Child Development*, 45, 803—806.
- Selman, R.L., & Demorest, A.P. 1984 Observing troubled children's interpersonal negotiation strategies : Implications of and for a developmental model. *Child Development*, 55, 288—304.
- Smetana, J.G. 1981 Preschool children's conceptions of moral and social rules. *Child Development*, 52, 1001—1008.
- Strayer, J., & Roberts, W. 1989 Children's empathy and role taking : Child and parental factors, and relations to prosocial behavior. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 10, 227—239.
- Tangney, J.P. 1991 Moral affect : The good, the bad and the ugly. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 598—607.
- Thompson, R.A., & Hoffman, M.L. 1980 Empathy and the development of guilt in children. *Developmental Psychology*, 16, 155—156.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親の共感との関係 教育心理学研究, 34, 324—331.
- Williams, C., & Bybee, J. 1994 What do children feel guilty about ? Developmental and gender differences. *Developmental Psychology*, 30, 617—623.
- 山岸明子 1980 役割取得能力の発達に影響する社会的経験の検討—“役割取得の機会”の観点からの分析— 心理学研究, 52, 289—295.
- 山岸明子 1981 2種の認知的役割取得能力に関する発達の研究 教育心理学研究, 29, 333—337.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., & King, R.A. 1979 Child rearing and children's prosocial initiations toward victims of distress. *Child Development*, 50, 319—330.

## 謝 辞

本論文作成にあたり、貴重なご助言を頂きました同志社大学山内弘継先生、トロント大学西里静彦先生に深く感謝致します。

また、本研究の遂行にあたり、ご協力頂きました、京都がくえん幼稚園木村三寿寿園長先生、そして幼稚園の諸先生方と園児の皆さんに深く感謝致します。

(2000.3.2 受稿, 11.17 受理)



## *Empathy and Role-Taking Ability : Guilt Feelings in 5-Year-Old Preschoolers*

TAKAYUKI ISHIKAWA (GRADUATE SCHOOL OF PSYCHOLOGY, DOSHISHA UNIVERSITY) AND

ICHIRO UCHIYAMA (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, DOSHISHA UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2001, 49, 60-68

Influences of both empathy and role-taking ability on guilt feelings were investigated in a study in which participants were 5-year-old preschoolers. Guilt feelings were induced by manipulating interpersonal situations and rule-breaking situations. 100 preschoolers were assessed on the following indices : guilt, empathy, and role-taking ability. Guilt was measured in terms of “feeling sorry” ; empathy, by the Affective Situation Test ; and role-taking ability, by Selman’s Task. The results indicate that empathy influenced guilt feelings in the interpersonal situation, and role-taking ability affected guilt feelings in the rule-breaking situation.

Key Words : guilt feelings, empathy, role-taking ability, 5-year-old preschoolers